

入選 低学年の部

## お母さんとぼくのせつめい書

三重県  
桑名市立久米小学校 三年

谷口 拓海

「いつてきます。」

ぼくは、大きな声で言った。そして、ランドセルをしょって、げんかんをとり出し、家が見えなくなる前にふりかえる。

(いた、いた。)

げんかんで、まだ大きく手をふっている人がいる。そう、あれがぼくのお母さんだ。

そして、ぼくはしゅうこう場所に向かった。お母さんは、いつも、ぼくが見えなくなるまで、手をふつてくれる。それも、時どきパジャマのままです!!

「行つてらっしゃい。」

ぼくはその言葉を聞きながら、毎日学校へむかっているのだ。(そうだ!!今日の夕ごはんに、カレーを作つてあげよう。)

ぼくのカレーは、天下一品だと、ほめてくれる。さいきんでは、肉、玉ねぎ、にんじん、じゃがいもなど、ぜんぶ一人で切つてカレーが作れるようになったのだ。

ぼくは小さいころ、お茶わんあらいをうれしそうにやっていたんだよ、と聞いたことがある。子ども用のほうちょうを、はじめてプレゼントしてもらった時も、ニコニコのこを切っていたみたいだ。ざんねんだけど、ぼくはそういうことをぜんぜんおぼえていないのだけだね。

でもね、今、料理をするのがとても楽しいんだ。いろんな切り方を教えてもらったり、いろんな料理を手つたうことができるから。

「いつもおてつだいありがとうね。」

お母さんが言う。ぼくは、(もつといっぱいできるようになるから、まつてね。)

ほんとうは、そう思っているんだ。

学校に着いた。氷がいっぱい入つたお茶をゴクゴクのんだ。(あー、つめたくておいしいなあ。)

キーンコーンカーンコーン♪

もうすぐ、じゅぎょうがはじまる時間だ。お母さんは、そうじきをかけている時間かな。それとも、せんたくきをまわしている時間かな。

そして、がんばつてぼくはべん強中。お母さんはなにをしているのかな。

そうだ、今日は大きな声で言おう。

「ただいまあ。」

げんかんの前で言おうかな。2かいのまだから手をふつてくれるかな。

いつも、ぼくが帰るのをまつていてくれるんだ。お母さん、いつもいつもありがとう。